

## 平成17年度 野幌プロジェクトフォローアップ委員会(第1回)議事要旨

- 1 日 時 平成17年11月15日(火) 12:45~16:20
- 2 場 所 北海道立野幌森林公園自然ふれあい交流館(レクチャールーム)
- 3 出席者 委員会委員11名全員出席(代理出席1名)  
(傍聴者、マスコミ関係者等を含め、出席者総数27人)
- 4 進 行 委員会は公開。  
五十嵐恒夫委員が委員長に選出され、副委員長には高橋委員を指名。  
進行は北海道森林管理局指導普及課長が、資料説明は同局石狩地域森林環境保全ふれあいセンター所長が担当。

### 5 議 事

(1) 北海道森林管理局計画部長挨拶

(2) 委員の紹介

(3) 委員長の選出

(4) 資料説明と現地確認について

事務局から、配布資料について概要説明。その後、昨秋の台風18号による風倒被害箇所について、17年度における植栽状況を現地で確認。現地では、植栽方法、取組状況等について説明。

(5) 平成17年度の取組状況及び今後の取組の展開について

事務局から、平成17年度の取組状況(資料6)、外来種(ニセアカシア)の更新(侵入)状況(資料7)、今後の取組の展開(資料8)について説明。

【現地確認、資料説明後、委員によるフリーディスカッション】

#### <委員の主な意見>

(資料6関係:シカの食害対策について)

- シカの食害防止ネットについて、野幌の森林ではシカによる食害は深刻ではないのではないかとということ、また、自然公園内の人工物の設置はできるだけ避けるべきであると考えられることから、この食害対策は時期尚早であり、早期に撤去することが望ましい。また、忌避剤等も考えていく必要があるのではないか。
- シカの食害防止ネットは、野幌でもシカが目撃されている状況の中で、食害防止対策の実験的な試みとして設置したもの。支柱は間伐材にするなど、景観にも配慮してしている。散策者にネットについて口頭での聞き取り(約25組、50名程度)をしたが、いずれも「特に気にならない」という旨の回答であった。
- シカ食害は急激に拡大するので、食害対策は初期の段階から始めるのが良い。自然公園だから人工物(ネット)は回避という対応をしていると、森林づくりはできない。

- 忌避剤は、雨が降ると効果が薄れるし、その種類によっては、林木に障害を及ぼすものもあり、忌避剤の使用は疑問である。また、電気柵を設置する方法もあるが、シカは電気には鈍感であり効果がなく、ネットの方が良い。
- ネットの設置については、現地を見ても特に違和感はなく、一過性のものであること、また、食害の予防処置と、一般市民、公園利用者に対しシカの食害問題を考える普及啓発になることから、問題ないのではないか。
- シカとの共存や、頭数管理の問題を含めていろいろな問題があるが、ある程度の被害は許容しながらバランスで対応することが望ましい。  
また、確実に植栽木を保護していくということと、観察しながら樹種を考えていくというような、長期的に「森の時間」というものを考えながら対応する必要があるのではないか。
- 地元の間では、シカについて今は話題にもならないぐらい牧草地の土手等でよく見かける。昨年の森林再生検討会においても、山火事とシカの食害の対策について検討をお願いしたところ。

(資料6関係：植栽状況について)

- 植栽箇所については周辺の残存植生を見ながら、水たまりになる所は事前に回避したり、水に抵抗力のある樹種を選択して植えてほしい。
- 野幌の森林は汎針広混交林帯に区分され、長期的にみるとシナノキエゾイタヤ林が優占し、樹種構成はトドマツ、シナノキ、カエデ類、ヤチダモ等を主体とする。今般植栽されているアカエゾマツについては、野幌ではその天然分布は小さく、今後できるだけ避けるべき。こうした樹種構成を考慮して植栽することが望ましい。
- 植生等の観察もしながら、森林づくりについては弾力的な対応をして欲しい。少し遅れても、樹種と話し合い、土地と話し合っただけ対応してほしいが、3年以内に植栽するという当初の計画もあることに留意されたい。
- 森林再生検討会の中で議論したが、この森林再生の取組では、風に強い森林をつくるなどの観点から、針葉樹と広葉樹を混植する、列間を広くし植栽密度を小さくする、天然更新を組み合わせることとしている点について理解すべき。
- 植栽箇所の看板については、樹種名、植栽目的等必要最小限の情報が書かれ、数についてもできるだけ少ない方が良い。先々はもう少し統一し、あまり目立たないものが望ましい。
- 野幌全体の看板、誘導標識等について、自然公園、森林公園らしいサインシステムを整備していくことが望ましい。

(資料7関係：外来種(ニセアカシア)について)

- 100年前の原始的な森林をつくるという観点から、ニセアカシアはそぐわないので、ニセアカシアの母樹も伐採することが必要である。伐採する場合は、理由を明らかにすることが重要で、理解を求める案内板等の設置も検討してはどうか。
- ニセアカシアの寿命等の解明のため、試験的に数本残して観察できるとよい。

(資料6、資料7関係のとりまとめ)

- 17年度の取組状況について、「みんなで森林づくり」、「野幌森林づくり塾」、「団体型森林づくり」に関しては、現地の一部で植栽木の枯損は見られたが、初年度の取組ということ踏まえると、おおむね良好で順調であると考えられる。
- シカの食害防止ネットについては、「団体型森林づくり」の活動の一つとしての実験的な試みであり、種々配慮して取り組んでいること等から、現段階において否定されるものではない。今後の試験的取組の成果を注視していくことが必要であると考えられる。
- ニセアカシアの取扱いについては、関係機関と調整をしつつ、また、試験のために残す場所も周囲に影響を及ぼさない所を選定して今後適切に措置することが望ましいと考えられる。

(資料8関係：今後の取組について)

- 野幌の100年前の原始性が感じられる森林について具体的なイメージをできれば検討し、そのイメージを基に、「モニタリング」についての具体的な方向を作ってほしい。
- 学校の総合学習を通じて江別市の自然、生物等に関心を持つ生徒等が最近増えていることから、国有林のフィールドを生かした小中学生向け環境教育のプログラムのものを今後検討してほしい。
- 野幌をフィールドにした森林環境教育については、野幌本来のすばらしさや野幌の特殊性を生かしたものにしてほしい。
- 野幌の森林ではどのような場所で「癒し」や「セラピー」があるのか、また、何が「癒し」になっているのかなどについて、モニターしても良いと思う。

(資料8関係のとりまとめ)

- 野幌の多様な森林をフィールドにした、いわば壮大な実験ともいえるこの「野幌プロジェクト」を推進するため、資料に記述されている新たな課題を着実に実現してほしい。今後の森林づくりの展開に期待したい。  
また、来年度はより一層市民、道民或いは国民の森林として評価されるよう、関係者の皆様には引き続き努力をお願いしたい。

(以上)